

ブック・レビュー

「語り継ぎたい。命の尊さ―阪神大震災ノート」住田功一著、一橋出版、一九九九年二月刊、A五判、七八頁、六〇〇円

本書は、当初は高校生向け社会科副読本として出版され、発行後マスコミから大きな反響が寄せられている。核家族化が進んだ現代において、生徒たちは人の死というものに身近に接する機会を奪われている。しかし、阪神大震災では六千四百人以上の人命が失われた。本書は、これらの人々の死を単なる数字の集積として終わらせまいという気持ちで書かれた。

筆者は、阪神大震災のとき、神戸の実家で被災し、そのまま報道を続けたNHKアナウンサーである。実家の近くは被害が少なかった。午前六時四分、そこで見た事実だけを勤務先の東京の報道局に報告した。彼は本書でこのように書いている。

「しかし、この六時四分という時刻は、いま振り返ると、住



宅崩壊・生き埋めなどで、すでに何千人もの命が失われていた時間だったのです。」

筆者はジャーナリストとしての限界を負いつつも、震災報道のアナウンサーとして、また、一人の人間として、目撃したこと、感じたことを率直に綴る。

本書の構成は、①震災現場で起きたこと、②もしまた災害が起こったら―被害を最小限に食い止めるために、③震災が人の心に残したもの、である。②では、震災の悲惨さに心を痛めながら、命を救うネットワークづくり、語り継ぐこと、どうしたら人の痛みを分かちあえるか、などの大切さについて題名通り「語り継ぐ」内容になっている。

(西村 美東士)